

# 自他両用法をもつ漢語サ変動詞について

顧 秋 利

## 要 約

日本語の動詞研究で、サ変動詞の自他の用法についてはまだ十分に論じられていない。本稿はおもに辞書で自他両用とされている漢語サ変動詞を対象にその用法を考察してみた。データベースから収集した実例から見ると、自他両用とされていた語はその実際の用法を自動詞のみ、他動詞のみ、自他両用という三種類に分けることができる。その中で自他両用の漢語サ変動詞はまた自動詞文の主語が他動詞文の目的語になれる場合となれない場合があると分けられる。それぞれの動詞の特徴と使役文の関係など別の角度からまた深く考察していきたいと思う。

## 【キーワード】

自他両用 漢語サ変動詞

### 1. はじめに

日本語の動詞研究の一部分として、自動詞・他動詞の研究が長くなされてきた。多くの動詞は自動詞か他動詞かに属するが、自他両用法をもつ動詞も少なからず存在している。その中で、和語動詞は、自動詞と他動詞が対応して、対になる場合が多い。一方、漢語サ変動詞は、和語動詞のような語尾変化がないので、自他同形である。従来の研究では、和語動詞の自他対応現象に注目されることが多かったが、サ変動詞の自他については、あまり論じられていない。本稿は自他両用の漢語サ変動詞に注目し、実例を分析した上で、その特徴を見ていきたいと思う。

### 2. 先行研究

#### 2.1 動詞の自他の認定

中村（2004）は『現代国語辞典』と『新選国語辞典』という二冊の国語辞典に載っている二字漢語サ変動詞の中に、自他の規定にゆれが生じているものを対象にし、語構成を考慮して、その自他性を考察しなおしている。自他認定の基準は一番よく知られている「を」格との関係を中心にしてしている。その結果、対象を表すヲ格を伴う二字漢語サ変動詞に対して、「自動詞」と表示されているものが多く存在した。自他認識のゆれている漢語サ変動詞について、表示がさまざまで、一致しない場合が多い。

許（2007）は動詞の自他の各分類基準を見てから、『新明解国語辞典』、『岩波国語辞典』、『明鏡国語辞典』という三つの国語辞典を考察対象にし、同じ動詞についても、それぞれ自他の表示が異なっている場合があるので、自他表示の問題点を論述した。結論としては国語辞典において自他の表示を廃止して、格の情報だけを伝えればいいと主張している。

#### 2.2 漢語サ変動詞の自他派生

自他両用の漢語サ変動詞はどのように派生したのか。影山（1996）は漢語サ変動詞を次のように分類している。

##### ①自動詞のみ

事故が発生する、地価が下落する、……

##### ②他動詞のみ

ビルを爆破する、通行人を殺害する、……

##### ③自他両用

拡大する、縮小する、完備する、……

その中で、③の自他両用の動名詞については次のように述べている。自他両用の漢語動名詞は使役構造（他動詞）を基にして、そこから反使役化によって自動詞が派生されているという。つまり、自他両用の漢語動名詞は他動詞用法が基本で、そこから自動詞用法が派生され、自他両用になるということである。つまり、自他両用の漢語サ変動詞には自動詞用法を基本とするものと他動詞用法を基本とするものがあると考えて、結果として、漢語サ変動詞を次のように分類している。

##### ① 自動詞用法だけを持つ漢語動名詞

##### ② 自動詞用法を基本とする自他両用の漢語動名詞

##### ③ 他動詞用法を基本とする自他両用の漢語動名詞

##### ④ 他動詞用法だけを持つ漢語動名詞

さらに、小林（2004）では、朝日新聞の社説（1985年から1991年までの7年分）から自他両用の漢語サ変動詞「～化」を抽出し、その実際の使用状況から見ると、小林（2000）の観点が支持され、自他両用の漢語サ変動詞が均一でない（自動詞用法を基本とするものと他動詞用法を基本とするものがある）ということが確かめられている。

しかし、小林が自他両用の漢語サ変動詞についての

研究は、「～化」を中心にし、それ以外のものについては論じられていない。二字漢語サ変動詞の場合はどうなるのが重要な課題として残されていると思う。

### 2.3 自他両用の漢語サ変動詞の意味体系

小林（1997）は「現行の一般国語辞典においてサ変動詞として用いられているものを収録した」北条（1973）から346語の自他両用の二字漢語動名詞を抽出した。それを国立国語研究所の『分類語彙表』にしたがって、その意味体系を分析した。その結果、「1.1 抽象的關係」に属するものが多く、「1.3 人間活動－精神および行為」に属するものが少ない。この分布は自他対応がある和語動詞の分布と平行しており、他動詞用法しかもたない二字漢語動名詞の分布とは対照的である。

### 2.4 日中対照研究

河村（2006）は、日中同形動詞の中に、日本語か中国語が自他両用のものを抜き出し、『毎日新聞』と『人民日報』からそれぞれ100例を抽出し、実際の使用状況を考察してから、それを四種類に分類した。それは「日本語、中国語ともに他動詞的なもの」、「日本語、中国語ともに自動詞的なもの」、「日本語、中国語ともに自他のバランスがとれているもの」、「日本語と中国語の自他のバランスがとれていないもの」である。その中で、自他両用のものでも、自動詞に偏ったものと他動詞に偏ったものがあることがわかった。

### 3. 研究方法

まず、調査対象を絞るため、『動詞・形容詞問題語用例集』の中の「自・他の決めにくい動詞」という表から、少なくともひとつの辞書で「両用」とされている二字漢語サ変動詞380語を抽出した。それらの語について、『毎日新聞』のデータベースを利用して、実際の用例を収集する。その例文の中で他動詞として使われているのかあるいは自動詞として使われているのかを判断し、その確率を見る。もし両方ともあれば、構文上どんな特徴があるのか、動詞自身にはどうかかわっているのかを分析していきたいと思う。

### 4. 本稿で動詞の自他認定

動詞の自他の認定は前述したように、さまざまな基準があって、ゆれている部分が多いので、本稿ではおもに、日本語教育で一番納得されているヲ格の取るか否かによって、動詞の自他を決めるという基準に従う。つまり、ヲ格を取る動詞は他動詞、ヲ格を取らな

い動詞は自動詞としている。受身文と使役文の取り扱いについては、もとの文に戻って、それが自動詞か他動詞かを判断する。

しかし、その基準に従っても、まだ判断しにくい場合がある。たとえば「選手の今後が注目される」という場合はもとの文が「今後を注目する」という他動詞用法でもありうるし、「今後に注目する」という自動詞用法でもありうるので、「自他の判断が不可能」ということにする。

### 5. 考察の結果

『毎日新聞』のデータベースを利用して、抽出した自他両用の漢語サ変動詞を検索し、集めた例文の中で、まず文中で自動詞的用法なのか他動詞的用法なのかを判断してみた。その結果、おおむね三つの種類に分類することができる。それは、自動詞用法のみ、他動詞用法のみ、それに、自他両用法ともあるタイプである。

#### 5.1 自動詞用法のみ

この種類の語は、文中で、ヲ格を取らずに自動詞として使われているか、あるいは使役用法で、もとの文を考えれば自動詞文になるという場合である。たとえば、

##### 一貫

- (1) 市教委の調査に対し、職員は一貫して「うっかりして持ち出した。万引きの意図はなかった」と話しているという。（毎日新聞2005.12.28）
- (2) 占領期からずっと、安全保障の交渉で、米側の主張は一貫している。（毎日新聞2005.12.23）

##### 一変

- (3) 日中は薄日が差し、小鳥のさえずりも聞こえるが、日暮れとともに光景は一変する。（毎日新聞2005.12.21）
- (4) 新チーム結成時、古賀はボックスで、U-19日本代表にはC T B候補として名を連ねていた。ラックサイドを直線的に突いてゴールに近づいてゆく、という佐賀工F Wの印象を一変させてしまった。（毎日新聞2005.12.29）

##### 交流

- (5) 名張市神屋の市立国津小学校（味岡一博校長、児童数25人）の児童24人が29日、近くの特別養護老人ホーム国津園を訪れ、縦笛の演奏を披露するなどしてお年寄りと交流した。（毎日新聞2005.06.30）
- 紙幅の関係で、用例は限っているが、そのような用法は一見わかるように自動詞用法という点で一致して

いる。

## 5.2 他動詞用法のみ

上にあげた例と異なってすべてが他動詞的な用法で、受身の形式でももとの文に戻ったら、他動詞として使われていることがわかるので、一種類として認められる。たとえば、

### 緩和

- (6) プロ野球は来季から、ユニホームの広告規制を緩和する。 (毎日新聞2005.12.29)
- (7) 今年8月には米国産リンゴに対する火傷病検疫措置の規制が緩和され、同協会は「生産者の不安は高まるばかり」としている。 (毎日新聞2005.12.22)
- (8) 01年に設定された現行の定数配分を00年の前回調査に当てはめると、格差は最大1.97倍で、人口の変動が格差をやや緩和させたことになる。 (毎日新聞2005.12.28)

### 換金

- (9) 取材費で購入したビール券を換金し着服するなど、職員の不祥事が相次いで発覚した。 (毎日新聞2005.12.30)
- このような用例からわかるように、すべて他動詞用法として使われている。

## 5.3 自他両用

前にも述べたように、第三種類として、自他両用があげられる。この種類の漢語サ変動詞は自動詞としても他動詞としても文中で現れている。その中で、自動詞文の主語が他動詞文の目的語になれる場合もあり、そうでない場合もある。

### 5.3.1 自動詞文の主語が他動詞文の目的語になれる場合

たとえば、

#### 移転

- (10) ゴール県庁によると恒久住宅への移転が必要な被災者は同県内で5079世帯。うち12月中旬までに214世帯が移転した。 (毎日新聞2005.12.29)
- (11) 03年春に同協会内にあった事務所を連盟事務職員の自宅に移転し、民宿利用者への案内を細々と続けていた。 (毎日新聞2005.12.30)

#### 開業

- (12) 06年3月16日に新北九州空港（同区・菊田町）が開業するため、現空港が年末年始やお盆の帰省客でにぎわうのは今回が最後。 (毎日新聞2005.12.30)
- (13) 大湾さんは自宅で診療所を開業していたが、数年

前に廃業していた。 (毎日新聞2005.12.31)

#### 完了

- (14) 今月上旬に工事がほぼ完了していた。 (毎日新聞2005.12.29)
- (15) 9月17日に作業を完了し、10月3日に神戸港出港。 (毎日新聞2005.12.29)
- この種類の漢語サ変動詞は、自動詞と他動詞両用法を備えているため、使役文の中ではその自他が判断しにくくなる。たとえば、
- (16) けいはんな線の新駅の学研奈良登美ヶ丘駅周辺には、学校法人奈良学園の幼稚園、小中学校、高校、大学を誘致するとともに、06年度にイオンのショッピングセンターとフィットネスなどの商業ビルを開業させる。 (毎日新聞2005.12.23)
- (17) 年末年始に間に合うよう、28日までに作業を完了させる。 (毎日新聞2005.12.23)
- 森（2007）では漢語サ変動詞について、スルとサセルの置換を論じていた。自動詞用法に偏った動詞はスルからサセルへ置き換えるために条件がないのに対して、他動詞用法に偏った動詞は非情物主語の場合が置き換えやすいと言われている。今後、サセルとの関係についてもっと詳しく考察していきたいと思っている。

### 5.3.2 自動詞文の主語が他動詞文の一致する場合

前節で述べたのは漢語サ変動詞の典型的な自他両用の場合であるが、それ以外、文中で自他両用法ともあるにもかかわらず、前のと異なって、主語が一致する場合がある。たとえば、

#### 運転

- (18) 小松容疑者が酒を飲んで運転していたことが分かり道交法違反（酒気帯び運転）容疑で現行犯逮捕した。 (毎日新聞2005.06.30)
- (19) 平野署は同日、大型トレーラー（27トン）を運転していた大正区小林西2の運転手、兼次秀之容疑者（52）を業務上過失傷害容疑で現行犯逮捕した。 (毎日新聞2005.06.30)

#### 押印

- (20) 同社広報部によると、自動車保険や火災保険の契約書や申込書に、同支社の社員約10人が勝手に押印していた。 (毎日新聞2005.12.27)
- (21) 「年賀」と朱記し切手が張られた私製年賀状は、15～28日に引き受けた場合、翌年1月1日の日付を押印する。 (毎日新聞2005.12.25)

(22) 手紙には元日の日付が押印された。

(毎日新聞2005.12.30)

こういう種類の語は意味構造から見ると、主語と目的語は別で、たとえ主語しか現れず、一見自動詞文のように見えるとしても、目的語を補う可能性が高い。ほかにも、似ている用法のある語がいくつか挙げられる。たとえば、応援、合奏、寄稿、協議などがその類である。

## 6. 終わりにとこれからの課題

本稿は辞書で自他両用とされている漢語サ変動詞の用法を見てきた。データベースから収集した事例から見ると、おもに自動詞のみ、他動詞のみ、自他両用という三種類に分けることができる。その中で自他両用の漢語サ変動詞はまた主語と目的語が一致する場合と一致しない場合がある。これから、収集する例文を増え、いっそう適切に分類することとともに、サセルとの関連、動詞の意味構造と動詞の分類というような角度と結び合って、より深く分析していこうと思う。

## 参考文献

河村静江 (2006) 「日中両言語における他動性について」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』第6号

影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房

影山太郎 (1996) 『動詞意味論——言語と認知の接点——』 くろしお出版

許永新 (2007) 「国語辞典における自他動詞の認定」 語彙・辞書研究会第31回研究発表会

小林英樹 (1997) 「自他両用法をもつ二字漢語動名詞の意味体系における分布」『計量国語学』 Vol.21 No.3

小林英樹 (2000) 「漢語動名詞の自他」『日本語教育』107号

小林英樹 (2004a) 「自他両用の漢語動名詞をめぐる」『語学と文学』第40号

小林英樹 (2004b) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』 ひつじ書房

須賀一好 早津恵美子 (1995) 『日本語研究資料集 動詞の自他』 ひつじ書房

中村亜由 (2005) 「二字漢語サ変動詞の自他について——国語辞典を例として——」『立教大学日本文学』94

西尾寅弥 宮島達夫 (1971) 『動詞・形容詞問題語用例集』 秀英出版

水谷静夫 (1982) 「現代語動詞の所謂自他の派生対立」『計量国語学』第十三巻第五号

村木新次郎 (2003) 「現代日本語における漢語の品詞性」『日語研究』2 商务印书馆

森 篤嗣 (2007) 「日本語の漢語サ変動詞におけるスーサセルの置換について」 シンポジウム「日本語研究と日本語教育研究の現状と課題」発表

こ しゅうり／北京日本学研究中心 言語教育コース修士課程  
qiuli\_gu2005@yahoo.co.jp